

平成31年度
 劇場・音楽堂等機能強化推進事業
 (地域の中核劇場・音楽堂等活性化事業)
 成果報告書

団 体 名	公益財団法人 神戸市民文化振興財団	
施 設 名	神戸アートビレッジセンター (KAVC)	
助 成 対 象 活 動 名	人材養成事業	
内定額(総額)	2,498	(千円)
公 演 事 業	0	(千円)
人材養成事業	2,498	(千円)
普及啓発事業	0	(千円)

2. 自己評価

(1) 妥当性

自己評価
<p>社会的役割（ミッション）や地域の特性等に基づき、事業が適切に組み立てられ、当初の予定通りに事業が進められていたか。</p> <p>神戸アートビレッジセンターは、「創る劇場」として、「若手芸術家と協働しながら新しい表現を探求すると共に、地域に開かれた劇場として街に関わる」ことを社会的役割の一つに掲げている。神戸市は、人口減社会の到来の中で、若者に選ばれるまちになるための施策「神戸 2020 ビジョン」を掲げたが、その中で若手芸術家の育成、芸術を拠点としたまちづくりの推進がうたわれており、その点から、当館は神戸市の中で数少ない演劇に適したホールをもつ公立文化施設として、神戸の演劇シーンを振興することが期待されている。</p> <p>今回の事業は、このミッションに基づき、地元高校生に向けて、演劇創作の楽しさを体感する「高校生のための演劇ワークショップ Go! Go! High School Project 2019」、Go! Go! High School Project を卒業した子どもたちによる劇団「エクステ」定期公演、関西若手の劇団による公演シリーズ「KAVC FLAG COMPANY 2019-2020」の関連企画としてのトーク&ワークショップ、以上3つを企画した。</p> <p>実施については、劇場の照明工事の影響により「エクステ」定期公演が実施できなくなったが、他2つの事業については、予定通りに進めることができた。</p>
<p>助成に値する文化的、社会的、経済的意義等が継続して認められるか。</p> <p>今回実施した事業について、以下のとおり文化的、社会的意義が認められるものと思われる。</p> <p>特に、「高校生のための演劇ワークショップ Go! Go! High School Project 2019」は、</p> <ul style="list-style-type: none">・ 地元高校生を対象とし、学校の枠を超えて、演劇を通じた交流を促進・ 地域特性を考慮し、どのような家庭事情であっても参加できるよう、無料で実施・ 2週間高校生が当館に通い続けることによる、年配者の多い地域の活性化 <p>など、文化的、社会的意義が強い。</p> <p>また、「KAVC FLAGCOMPANY 2019-2020 関連企画 ワークショップ&トークシリーズ」については、</p> <ul style="list-style-type: none">・ 地元の演劇ファンの掘り起こし・ 日本ではまだ不十分な批評文化の醸成への寄与 <p>などがあげられる。</p>

(2) 有効性

自己評価

目標を達成したか。

要求時に立てた目標の達成について：

「Go! Go! High School Project 2019」

- ・参加者人数について、目標 25 名→実績 24 名であり、ほぼ達成した。
- ・成果発表公演の入場者数について、目標 1 公演あたり 150 名、3 公演で 450 名としていたが、参加人数と演目の関係から、トリプルキャストではなく、ダブルキャストとなり、1 公演ずつの計 2 公演となった。実績値は、2 公演で 340 名であったので、1 公演あたり 170 名の入場者数となり、目標を達成した。

「KAVC FLAG COMPANY 関連企画 ワークショップ&トーク」

- ・ワークショップの参加人数について、目標 1 回あたり 20 名→実績は平均 12 名だったので、目標値には至らなかった。原因は情報公開の時期と広報期間の短さによるところもあるが、そもそも当館でワークショップをする場合、内容によって会場の広さから適正値は 15 名程度であることがわかり、申込者多数の場合も 15 名程度に絞ったことも挙げられる。
- ・関連企画の実施は「KAVC FLAG COMPANY 2019-2020」の入場者数増を期待したのもであったため、本体の「KAVC FLAG COMPANY」の入場者数について目標値を、1 公演あたり 150 名と設定していた。総入場者数を総公演数で割った平均は約 90 名であり、実績値としては、目標値に遠く及ばなかった。原因は目標値の設定の仕方にもあり、参加劇団は当館のホールの特徴を最大限に生かした演出を考えて舞台・客席設営をした結果、設置客席数が 150 に満たない場合もあった。当館のように、舞台も客席も自由に設置できる場合、設定する客席数が大きく変わることを考慮し、目標値を席数ではなく、設置客席数に対する割合で考えるのも有効ではないかと考えた。その場合、集客率は平均約 74.6%となり、目標値としては設定していないが、想定していたものに近い数値となる。

(3) 効率性

自己評価

アウトプットに対して、事業期間が適切で、当初の計画通りに進んだか。

アウトプットに対して、事業費が適切で、当初の計画通りに進んだか。

「高校生のための演劇ワークショップ Go! Go! High School Project 2019」について、事業期間は当初の予定通り進めることができた。収支については、もともと参加費無料で実施する事業であったため、収入についての変更はない。支出については、参加者の人数や演劇経験を確認してから演目を決定するため、大道具・小道具・衣装などの支出想定が難しいが、今年度については支出が控えめであった。総入場者数は、想定より上回っているため、総じて、効率性はよかったと言える。

「KAVC FLAG COMPANY 2019-2020 関連企画 ワークショップ&トークシリーズ」については、事業期間は当初の予定通りにほぼ進めることができた。「KAVC FLAG COMPANY 2019-2020」シリーズの7劇団の公演にあわせて、1名ずつのゲストを招聘し、ワークショップとアフタートークを実施した。また、劇評文化の充実を図るため、各回4名以上の方に批評を執筆していただいた。収支決算については、支出についてはほぼ予定通りであった。収入については、前項で説明したように、想定より参加者が少なかったため、減少している。しかし、総じては、効率的に事業運営ができたと考える。

(4) 創造性

自己評価

地域の文化拠点としての機能を最大限に発揮する優れた事業であった（と認められる）か。

当館は地域の文化創造拠点として、また、神戸に数少ない演劇に適した公立ホールとして、神戸の演劇シーンの振興を担っている。舞台芸術プログラム・ディレクターとして、演出家のウォーリー木下氏を平成30年度に迎え、平成31年度から新たに、関西の今注目すべき劇団をセレクトし、公演を実施する「KAVC FLAG COMPANY」を始めた。「KAVC FLAG COMPANY 2019-2020」は、これまでとは違った神戸アートビレッジセンターとしての色が前面に押し出されたことや、ウォーリー木下氏がセレクトしたプログラムという点が注目され、新聞や演劇サイトなど多数のメディアに取り上げていただいた。

また、関連企画としてのアフタートークとワークショップも、ウォーリー木下氏のネットワークを生かしたゲストの招聘が実現した。ケラリーノ・サンドロヴィッチ氏をはじめ、後藤ひろひと氏、上田誠氏（ヨーロッパ企画）、柴幸男氏（ままと）、三浦直之（ロロ）など、多彩な演劇人をゲストとして呼ぶことができた。上演された作品に対する批評の充実にも力を入れた。専門家の劇評はもちろんのこと、メディアの方や、出演劇団と同世代の演劇人、美学専攻の大学院生など、多彩な視点を取り入れるようにした。

劇場は、作品を上演するだけの空間ではなく、体験し、共有する場所として機能する。「KAVC FLAG COMPANY 2019-2020 関連企画 ワークショップ&トークシリーズ」は、神戸アートビレッジセンターが、そのような機能を発揮できた事業であったと考える。

自己評価

地域の実演芸術等の振興など、地域の文化芸術の発展につながっていた（と認められる）か。

「高校生のための演劇ワークショップ Go! Go! High School Project 2019」は、地域の文化芸術の発展を意識した事業であった。この企画は、学校の枠を超えて、高校生があつまり、一つの演劇作品を集中的につくり、最終日に成果発表公演を行うものである。学校とは違う、本格的な演劇ホールで、プロの演出家による指導、舞台制作を体験する。ナビゲーターである演出家の大塚氏のもとで、劇場である神戸アートビレッジセンターの全面的バックアップを受けて、高校生たちは2週間舞台づくりに没頭することができるのだ。これは、高校生たちにとっては得難い経験であると同時に、未来の演劇界を支える人材を育成するプログラムとしても機能している。今年度は1年生の参加が多かったが、3年間参加する高校生もあり、地域からのニーズの強いプログラムと言える。

また、「Go! Go! High School Project 2019」は、参加者である高校生たちの育成だけでなく、関西における新たな演劇ナビゲーターの育成も視野に入れている。具体的には、「KAVC FLAG COMPANY 2019-2020」参加劇団であるプロトテアトル主宰の F0 ペレイラー宏一朗氏に、演出助手をお願いした。このように地域における演劇ワークショップのできるナビゲーターが育つことで、神戸の演劇シーンはより活性化するのではないかと考える。

(5) 持続性

自己評価

事業を通じて組織活動が持続的に発展した（と認められる）か。

平成 31 年度事業終了後も、神戸アートビレッジセンターが「創る劇場」として、また地域の文化的広場として、持続的に発展できるよう、引き続き取り組んでいる。

神戸アートビレッジセンターとしては、ウォーリー木下氏が舞台芸術プログラム・ディレクターとして留任し、演劇のプログラムについてアドバイスをいただいている。演劇担当の別部署への異動に伴い、演劇アシスタントが担当になるなど、キャリアアップの流れを作ると同時に、神戸アートビレッジセンターの演劇事業の流れを保つようにしている。KAVC FLAG COMPANY は令和 2 年度も継続して取り組むこととなり、長期的に取り組むことで、関西の演劇シーンのさらなる活性化と、劇評文化の定着を図っていきたいと考えている。

神戸アートビレッジセンターの管理運営を担っている、公益財団法人 神戸市民文化振興財団としては、近年正規職員の数を増やしており、経理・事業・舞台など各部署に専門職員を配属できるようになってきている。神戸の文化振興を担う専門機関として、職員の専門化と育成を図り、寄与できるよう取り組んでいる。

財政面については、新型コロナの影響により年度末の事業キャンセルなどがあったが、それを除けば、収支としてはバランスがとれるように改善されてきた。特に、神戸の財界とのつながりは、「マザーポートクラブ」の設立によって、強くなっており、引き続き、事業の支援を働きかけていきたい。